

## 議 事 録 [令和 4 年度 外部評価委員会]

日 時	令和 5 年 3 月 7 日(火) 16:00～17:30		
場 所	21 号館 503、504 室 および Zoom ミーティング(ハイフレックス開催)	進 行	谷 正史
外部評価委員 (敬称略) ※五十音順	<p>おおもり みつる 大森 充 (共和電機工業株式会社 代表取締役)</p> <p>こまつがわ ひろし 小松川 浩 (公立千歳科学技術大学 教授)</p> <p>ぶんや もとのぶ 文谷 元信 (岡山県高等学校工業教育協会 理事長) ※Zoom によるオンライン参加</p> <p>むらかど しげあき 村角 薫明 (金沢市都市政策局企画調整課 課長) ※書面参加</p> <p>よこし あき 横越 亜紀 (株式会社北國フィナンシャルホールディングス 執行役員 人材開発部長)</p>		
学内参加者 (敬称略)	<p>大澤 敏、鹿田 正昭、廣瀬 康夫、森本 喜隆、高野 則之、出原 立子、下川 雄一、 露本 伊佐男、大矢 寿美子、山口 敦史、徳永 光晴、佐藤 進、青木 隆、川崎 寧史、 武市 祥司、鈴木 亮一、宮里 心一 谷 正史、新井 真二、涌村 豊、河合 儀昌、鈴木 節純</p>		
欠席者(敬称略)			
次 第	<p>1. <u>開催挨拶</u> <span style="float: right;">学長 大澤 敏</span></p> <p>2. <u>全体説明</u> <span style="float: right;">学長 大澤 敏</span></p> <p>3. <u>2023 年度カリキュラム改革について</u> <span style="float: right;">教務部長 電気電子工学科・教授 山口 敦史</span></p> <p>4. <u>KIT 入学教育の取り組み</u> <span style="float: right;">入試部長 修学基礎教育課程・教授 青木 隆</span></p> <p>5. <u>取組み評価について</u> 外部評価委員からの質疑応答および意見交換</p> <p>6. <u>本日の委員会を振り返って(統括)</u> <span style="float: right;">学長 大澤 敏</span></p>		
資 料	<p>【資料1】 社会実装教育研究と教育改革</p> <p>【資料2】 2023 年度カリキュラム改革について</p> <p>【資料3】 KIT 入学教育の取り組み ー 学生自らが成長へ歩みだす修学環境の構築ー</p>		

## 議 事 録

外部評価委員会の開催に先立ち、谷事務局長より、本委員会の趣旨が説明された。三つのポリシーを基に大学運営をすることが法令で定められている。本委員会は、三つのポリシーに基づく本学の教育研究活動全般の取り組みについて、学外の有識者から直接意見をいただく貴重な機会であり、それらの意見を基に本学の充実発展を推進させていくための、最も重要な会議体の一つとして位置付けられている旨が説明された。

次に、外部評価委員の紹介ならびに本学側の出席者として学長、副学長、学部長をはじめ、学長方針に基づいて方向性を具体化している教学組織を司る教職員が紹介された。

また、本日の次第として、同日開催された教育DXシンポジウムの内容を含め、学長方針の下で現在取り組んでいる教育改革のうちの、カリキュラム編成および高校教育から大学への学修をスムーズに移行していくための入学教育を新たな展開としてご説明し、ご意見をいただきたい旨が説明された。

### 1. 開催挨拶（大澤 敏 学長）

はじめに大澤学長より、ご参加いただいた外部評価委員に対し感謝の意が述べられた。続いて、昨年度の本委員会でご指摘いただいた事項に対するその後の取り組みについて報告された。

- ・大森様からは、「学生を社会に出すための工場のような感覚を抱いた」とのご指摘に衝撃を受け、多様な視点から学生を育てるということを考えた次第である。
- ・寺井様からは、ジョブ型雇用の動向から、より即戦力となる人材育成の必要性や、アジャイル型の教育を取り入れたらよいのではないかとのご指摘内容を取り組みに反映させていただいている。
- ・文谷様からは、道徳的な価値はどうなっているのかという本質的なことを問われた。修学基礎教育課程と専門教育課程とが協同して考えていく問題として、新しい取り組みを始めている。
- ・金沢市とは、これからは街の中で実際に学生が活動して様々な課題を解決していくことを授業の中でやっという試みが始まっている。
- ・小松川様からは、授業を作ることに学生が参画するとよいとのご指摘内容を、今まさに実践しておりご意見いただければと思う。

要約すると、学生がキャンパスに留まるのではなく、社会に出ていく教育をやらないといけない。大学で学んだことが、社会において何かしらのアクションを起こした中で気づきが起こる、そういう改革をしようと社会実装教育を柱とした教育改革を進めている。

社会において、技術者ではない人を相手にする時、リベラルアーツや文理横断という考え方が必要となる一方で、本学は工学を基本としているので、それをより深く掘り下げる学修も必要である。社会で知識と技術を活用することを視点に置いた教育改革をするというのが変わらない全体方針である。

### 2. 全体説明（大澤 敏 学長）

【資料1】に基づき、大澤学長より以下の通り説明がなされ、世代・分野・文化を超えて生涯学び続けることができる大学を目指す方向で、まだ教育改革の途中だが、様々な角度からご指摘いただきたいと述べられた。

### 本学の全体像について(【資料1】2～5 ページ)

- ・本学が目標にしているところは、学生が社会に出た時に役立つであろう、あるいは身に付けておくべきマインドや技術を提供していくこと。変化していく社会の中で様々な人と関わりながら学び方を学んでいく。社会との共創において学生を伸ばしていくことが中心になる。
- ・そのフィールドを本学は持っており、100 以上のプロジェクトが金沢市近郊の地域で行われている。
- ・本学の一番の特長は、チーム活動で課題を発見し、解決策を提示して、有効性を検証するプロセスを学ぶことである。
- ・一方で高等学校において「情報 I」の科目が始まり、本学が長年実践してきた問題発見解決検証のプロセスが、高等学校においても行われているが、これからは体験することが大事になってくる。高等学校の中でも授業で教えられるのか混乱が起きていると聞いている。単にプロセスがあるということではなく、体験する中で PBL をまわして、その中に新しい技術・学問を取り入れていく必要がある。
- ・また、日本では小さい頃から同じ年代の子たちとの学びが相当長い間続く。日本の特徴的な教育であっていい場合もあるが、多くの国では様々な年代の方が大学でも関わっている。本学が掲げるディプロマポリシー(以下、DP)にある、「世代・分野・文化を超えてイノベーションを実現(DP3)」するには、「専門知識を知恵に変換(DP1)」し、「社会の多様な問題を発見し解決(DP2)」するプロセスが重要であり、これをやるためには学内だけでは出来ない。

### 2023 年度教育改革について(【資料1】6～14 ページ)

- ・2023 年度教育改革の目的は二つある。一つは、自分の専門力というバックボーンのもとに国際教養力を統合させた STEAM 教育を充実させ、社会実装力を醸成する。もう一つは、多様化する学生に対していかに教育システムをうまく適合させていくか。教育 DX を活用して個別最適化を実現する。
- ・従来、産学連携で共同研究をしたり、共同プロジェクトを学外で進めていたが、コーオプ教育は学生が企業で実際に働きそれを単位化するもので、企業にも学生にとってもメリットがあるとディスカッションする中で分かってきた。
- ・大学と社会が有機的に繋がる教育環境を広げていくことで、教育改革を行う。
- ・リカレント教育、クラスター研究室もそのうちの一つであり、学生と企業の方が一緒に活動することで、お互いの刺激になっている。
- ・複式学級という制度があるが、一つのクラスの中に上級生と下級生がいることが非常に重要であり、日本の教育制度の中で一番欠けていると思われる。これを導入しようと、1年次の科目を基礎の教員と専門の教員が協同運営する。まずは考え方が異なる教員が文理融合することになり、その中に大学院生や学部生も参画する仕組みを今年度試行を始め、非常に大きな成果が得られた。これを来年度は全学展開する。
- ・イノベーションを起こす、あるいは社会でうまく生きていくためには活力が必要であり、ポジティブ感情がどういところから起こるのかを演習する well-being 実践科目を全学必修化する。

### 3. 2023 年度カリキュラム改革について (山口 敦史 教務部長)

2023 年度カリキュラム改革について、【資料2】に基づき、山口教務部長より以下の通り説明がなされた。

### 修学レベルの広がりへの対応(【資料2】3～5 ページ)

- ・理解力の低い学生への対応として、今までのように一律の授業をしていたのではやっていけない状況にあると認識している。教育 DX シンポジウムでの報告にあったように、過去の学生データを解析したところ、留年・退学の起こるタイミングを分析した結果、1年次に難関科目と呼ぶ不合格率の高い科目がある。この科目を徹底的にフォローすることが必要となり、各学科・課程で Qlik sense を用いて難関科目を分析し、その科目に対して単位の細分化、補充授業の設定、後追いクラスの設定等の対策をとる。
- ・優秀な学生にはモチベーションが下がらないよう、上位学年の授業科目が先取り履修できる仕組みを構築する。高度な専門科目の面白さを早く味わってもらいたい。基礎的な科目はオンデマンドを活用して単位認定していきたい。
- ・早期卒業・留学・長期インターンシップ等の様々な選択肢が広がると思っている。

#### 多様な幅広い志向への対応 (【資料2】6～9 ページ)

- ・大学には DP があり、身に付けなければならない能力を定めているが、各学科・課程でミニマム・リクワイアメント(その科目の基礎となる、最低限修得すべき知識や能力)を再検討し、必修科目を削減することにより、選択科目を広げる。様々な科目を履修することができるようになり、自分の得意なところで勝負してもらおうという方針である。
- ・人文・社会科学から自然科学まで幅広い範囲で科目をラインナップしたリベラルアーツ系科目を設置する。「より広く」も「より深く」も学べ、学生の志向に合わせた選択の自由度を与える。
- ・リベラルアーツ系科目の中に、授業をすべて英語で実施し、グローバルに活躍する人材を育成するプログラムとして国際教養理工学課程を設置する。

#### これから求められる教育の強化 (【資料2】10～11 ページ)

- ・数理基礎教育課程から数理・データサイエンス・AI 教育課程へ名称を改変し、Society5.0 の社会に向かうにおいて、データサイエンスを使える人材を育成する。
- ・「KIT 数理データサイエンス教育プログラム」として、「AI 基礎」「ICT 入門」等の科目により、数理・データサイエンス・AI の知識や技術の理解を高め、課題解決のため実践的に学習できる教育プログラムを全学生に提供している。これは数理・データサイエンス・AI の基礎力を身に付けて卒業できることを保証する仕組みであるとして文部科学省の「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム(リテラシーレベル)」に認定されている。
- ・AI が登場すると、簡単なことはAIがやってくれるようになる。人間が本当に価値を発揮するところはイノベーションだと思う。その手法を学ぶような科目「イノベーション基礎(3年次)」を新設する。
- ・心持をポジティブにするため、ポジティブ心理学を用いた「実践ウェルビーイング(1年次)」を新設する。

#### 本学の良い部分を堅持&進化 (【資料2】12～14 ページ)

- ・「修学」×「専門」と学生同士の学び合い

「修学基礎」の授業は1年次の前・後学期に開講され、面倒見良く、学生が学ぶ習慣を身に付ける授業である。後学期にはキャリアデザインやこれから自分は何を学んでいくのかを教える内容になっていくが、その中に専門の教員や先輩学生が参画する。先輩・後輩の交流ができるし、これから自分が学ぶ内容がどういう風に役立つのか明確になり、学ぶモチベーションが上がる。今年度3学科で試行したところ、学生の気持ちが良い方向に向かったとのデータがあり、来年度から全学的に展開する。

- ・自治体との連携によるプロジェクト型授業

従来、自治体からテーマをもらい、学生がチームになってその解決策を提案するプロジェクトデザイン教育(以下、PD 教育)に取り組んできたが、今年金沢市長が来校された折に、学生が解決策を提案するだけでなく、実際に街に出て調査・実証するところまでやってみましょうという提案を受け、夏期集中講座(選択科目)として単位認定を計画中である。

#### 4. KIT 入学教育の取り組み (青木 隆 入試部長)

KIT 入学教育の取り組みについて、【資料3】に基づき、青木入試部長より以下の通り説明がなされた。

- ・KIT 入学教育の取り組みについては、昨年度の本委員会において説明しており、今回は具体的に取り組み事例を紹介する。
- ・KIT 入学教育の狙いは二つある。一つは、学修の進んだ学生には高校生の時から単位を取得してもらい、入学後は上位科目を取るなどして、大学院進学・留学などに繋げてほしい。もう一つは、ミスマッチを無くしていきたい、早期退学を無くしていきたい、という思いでスタートしている。
- ・まずは、ミスマッチを無くすという取り組みからスタートした。志願者数の減少に伴って、推薦系入試で入学してくる学生が5割を超え、今後益々多くなっていくと予想している。その結果、学習歴の高い・低いが見受けられる。数理の学習については数理工教育研究センターにおいてフォローアップを行っている。
- ・退学者の推移を見ると、入試区分による理由とは一概には言えないのではないかと。では何が問題か、新入生に対して行っている KIT 総合アンケートを分析した。「学科を選択した最も大きな理由」では、「学科で学ぶ内容」が突出してはいるが、増加傾向は止まっている。「目的・目標がある」という回答も増加傾向は止まっており、入試区分別では、推薦系入試での入学者に回答率が高かった。
- ・そこで、入学教育では、大学での授業を紹介し、高校までに押さえておくべき学習内容や大学での学び方について、努力の方法を具現化するような内容をやっていきたいと考えた。夢、憧れや目標を示すことを目的に学科・研究内容・施設などの紹介を行うオープンキャンパス等とは分けて、入学教育では実状を見てほしいと考え、学修力やモチベーションに関連する内容を 2020 年度より実施している。
- ・2023 年度入学生より、入学手続きをした学生を対象に、100 分 7 回の授業をオンデマンドで受講し、入学後に復習講座と小テストを実施し単位を認定する科目として「最適化の数理」を設けた。2024 年度入学生からは、専門基礎必修科目から先取科目の準備を進めている。これは、学修の進んだ学生へ対応するものである。
- ・取り組み評価として、成績、出席率ともに受講者の方が非受講者よりも高かったが、これは、もともと入学前から取り組んでくれるような意欲のある学生だからであろうと想像できる。別の例を挙げると、情報工学科はもともと課外活動への参加が少ない学科であるが、その情報工学科において課外活動への参加者が増えてきたのは良かった点と考える。
- ・単に高大接続の場面だけで終わるのでは何の意味もなく、初年次教育とどのようにマッチさせて繋げていくかが重要になってくると考えている。

#### 5. 取組み評価について

各外部評価委員の方々から以下のご意見をいただいた。

## (公立千歳科学技術大学)小松川 浩 様からのご意見

### 「縦の繋がり」について

- ・「縦の繋がり」を意識した教育は、即効性のある取り組みとして評価できる。自身も1年生の必修科目を担当した経験があり、1年生を教える教員の大変さが分かり、苦労を共有できたのは大きな経験であった。
- ・ポイントは帰属意識を高めることだと思われる。自身の大学でも非常に効果があった。
- ・専門教育課程の教員が初年次に関わり、また先輩・後輩と一緒に学ぶ環境は、優れた FD 活動に繋がると期待できる。現在国が進める学修者本位の教育では、入学から卒業まで学生がどのように考え、成長するかをしっかりと大学が把握することを求めている。この点において、卒業段階で学生を指導する教員が、入学段階から学生の学びを知ることや、そこに関わる教員の苦労を知るとは、三つのポリシーの整合性を現場レベルで確認するという意味で、極めて有効な教育マネジメント施策と考えられる。

### 「修学レベルの広がりへの対応」について

- ・「修学レベルの広がりへの対応」は大変苦勞する点と共感できる。学び方をしっかり理解させるしかない。令和4年10月1日に大学設置基準等の一部を改正する省令が施行された。授業外学修も含めた45時間の学修において、学生自身にどのように学ばせていくかという発想で取り組まなければいけないが、授業外も含め全てを教員がやろうとすると破綻してしまうので、教育 DX を活用しながらアダプティブな学修支援を図るシステムの運用等が望まれる。自身の大学はそういうところでカバーしてきた経験がある。機会があれば情報共有させていただきたい。

### 「入学教育」について

- ・入学教育での取り組みは大変きめ細かく、受験生や入学予定者の金沢工業大学への動機付けに十分資する取り組みである。入学教育もそうだが、貴学は正課・正課外での活動に関わる様々な教育方法や内容という教育資産をお持ちである。こうした資産を、先生方一人ひとりの授業運営の中に今後上手に取り込んで頂くことを期待している。そうした個々の教育ノウハウを互いに共有し、広め合って、教育 DX の推進を図って頂くことを期待している。

### 「教育 DX シンポジウム」について

- ・着実に教学 IR の成果が出ていることを確認した。特に退学者を未然に防ぐべく、機械学習によって代表的な特徴量を抽出し、数理系の基礎教育とデータ共有・学修支援を図ろうとしている取り組みは非常に有用と考える。今後、多様な学生に対して、アダプティブな学修支援を図るシステムの運用が初年次系を中心に全学展開されれば、教育 DX による個別最適な学びそのものと言える。
- ・BI を活用してデータ分析できる仕組みの確立とデータを全学的に活用できるようにしていることも大変すばらしいと考える。こうしたデータを、是非、数理 DS 教育の中で活用されると良いのではと思われた。学生が、自ら学ぶ大学のデータを活用し、大学を良くするための施策を考えることは、実践的な数理 DS・AI 教育そのものである。また大学にとっても、ユーザである学生参加のアジャイル志向の教育改革に繋がるのではと思われた。今回ポスターセッションで、多くの学生が卒業研究で VR 等を活用した教育関連の取り組みを提案・実装されている姿を拝見し、その可能性を感じた次第である。

## (岡山県高等学校工業教育協会)文谷 元信 様からのご意見

### 「高大接続」について

- ・入学教育の説明の中にもあったように、問題・課題を発見することが非常に難しいと感じている。質問力をどのようにして鍛えていくかが重要ではないか。講演を聞いても質問一つ手が挙がらない状況がたくさんあるが、いかに自分事と捉え、質問を見つけていくか・考えていくかを鍛える場面が必要なのではないか。学びの中で質問することを大切に、質問を受けながら考えさせていくことが大切であると考えている。

### 「PD 教育」について

- ・カリキュラムの支柱におく「PD 教育」は高く評価でき、継続して取り組んでいただきたい。
- ・PD 教育に魅力を感じ、岡山県においては高大接続に関する連携協定を締結して、工業高校を中心に現1年生から新教育課程の下で PBL の学びを推進し、早くから取り組んでいる高校では生徒の学びに成果が出はじめていていると感じている。一方、普通科を中心として取り組みが進んでいない高校に対しては、教員集団として学びが弱いことから、PBL ガイドブックを独自に作成し多くの教員に PBL の学びを実践させようと動いている。本県だけではなく、様々な県で意識をもって PBL の教育を取り入れ始めており、2年後には、PBL の学びをしっかりと身につけた生徒が全国の大学に進学していくこととなる。多くの生徒は今までにない PBL のやり方・考え方で、学びに対し非常に楽しいなという印象を受けている。大学にあっては、高校までの学びが繋がり、さらに発展できる場であってほしいと高校側からは強く望んでいる。その点では、金沢市・野々市市と連携した、実践的な教育の場があることは非常に魅力であり、大切にしていきたい。

### 「縦の繋がり」について

- ・「縦の繋がり」を意識した教育は、昨年度に指摘した人間力・道徳力の育成にも繋がるものと思われる。集団において異なる学年が交わっていく中で、低学年が成長するだけではなく、高学年の成長にもものすごく繋がる。
- ・授業という集団としての形もよいが、「B&S(ブラザー&シスター)」のような「頼れる先輩と後輩」という関係を様々な所で形成することで、大学での学生の学びや生活の満足度が上がり、居心地の良い大学・明るく楽しいキャンパスが形成され、より魅力的な大学になると感じた。ポジティブ心理学も一つではあるが、最後はやはり人と人の繋がりが大事であり、困った時には助けてくれるような面倒見の部分を中心に歩進んだ学生同士の関係になっていけばよいと感じた。

## (金沢市都市政策局企画調整課)村角 薫明 様からのご意見

※村角様は、本務のご都合により書面回答となったため、村角様のご意見は谷事務局長より紹介された。

- ・プロジェクトデザイン科目や Well-being 実践科目のような実践型の科目を必修としていることから、教育課程において「実践」を非常に重視し、実践を通じて課題解決能力を身につけた人材の育成に取り組んでいることが重要であるという風を感じた。
- ・そうした人材は地域において最も求められる人材であり、本市としても、プロジェクトデザイン科目において引き続き連携して取り組んでほしい。
- ・新たに貴学と連携して実施するプロジェクト型授業のように、学生がキャンパスを飛び出し、実際に社会課題に触れ、解決のための方策を実践する機会を設けていきたいと考えている。

## (共和電機工業株式会社)大森 充 様からのご意見

### 「縦の繋がり」について

- ・「縦の繋がり」を意識した教育は評価できる。多様性が重要視されがちな昨今だが、それ以外にも帰属意識というか、人間性・社会性・公平性等を磨いていくことが大事であると思われる。多様性と包摂性を共に具備していかなければ、企業に入った時にエンゲージメントを高めて働くことに繋がらないのではないかと感じている。

### 「教育 DX」について

- ・ AI を活用し学生の状況把握ができるようになった点は、社会に出た時に自分がどのような人材になっていなければいけないかを学生自身がイメージして、そこに向けて自分自身を変革しながら、同時に人間性・社会性を磨くことが出来るような、多様な選択肢に富んだ大学を目指しておられるものと強く感じた。今の世の中にマッチした取り組みと考えている。

### 「中途採用」について

- ・弊社の例では、退職者が増えてきた一方で、中途での入社を希望される方が同じくらいの割合でいる。ある統計によると、40 歳代で転職を経験している人の割合が 6 割を超える。専門分野の知識や高度なスキルを持つ人材、いわゆる即戦力となる人材を求める企業というのは、確実に増加傾向にあるものと思われる。中途採用者数が増えることによって、大学にとっては卒業生の受入れ先のキャパシティが減るのではないか、大学の就職状況への影響の有無が、もし分かれば教えていただきたい。

⇒(徳永進路部長)

- ・影響はないと考えている。日本の人口がずっと減少してきているので、すべての業界が人手不足になっている。日本の社会が生産性を上げない限り、すべての会社が人手が足りないという状況は、おそらくはしばらく続くのではないかと考えている。

### 「コーオペ教育」について

- ・「コーオペ教育」では、学生がもっとこういう研究をしたいという気持ちが高まる様子を直接見ることができ、また、コーオペ教育によって得られる企業の気付きもあり、重要なものを含む制度であると感じている。地元で優秀な技術者を残すという視点においても非常に有効なものと思われ、産業界としても魅力ある存在にならなければいけないと感じている。

## (株式会社北國フィナンシャルホールディングス)横越 亜紀 様からのご意見

### 「中途採用・キャリア採用」について

- ・入社してもなかなか馴染めずに途中でリタイアしてしまう社員がいる一方で、中途採用者も増えてきている。企業側としても、専門分野の知識や高度なスキルをもつ即戦力人材を求めるため中途採用やキャリア採用が増えてきている。転職することはマイナスなイメージではない。これから社会に出ていく学生には、就職することが最終目的ではなく、人材市場の中でどれだけキャリアアップして自身の価値を高めていけるかが重要であり、長く自分の力で社会のため



に役立つ人材になっていけるよう、少し先のゴールを見据えられるような学生の育成が望まれる。

#### 「修学レベルの広がりへの対応」について

- ・理解力の低い学生と優秀な学生それぞれに合わせた丁寧な指導は評価できる。一方で、理解力の低い学生に対しては、手取り足取り次にやることを教えてあげることが、自らで次に何を学ぶべきかを考えられる、自然性の高い人材になり得るのかという視点を考慮いただけると良い。社会人になってからも学びは続き、その時点では誰も教えてはくれない。自らで学び続けることのできる学生の育成が望まれる。

#### 「PD 教育」について

- ・社会に出て一つの案件を最初から最後までやり遂げようとする時、小さな事でもよいので一つ自分で成し遂げたという成功体験が若者を動かしていく原動力になると感じている。こうした体験を少しでも多く積ませてあげられるよう継続して取り組んでいただきたい。

#### 「入学教育」について

- ・ミスマッチの解消、学びへの耐性は非常に興味深く、具現化するための努力の方法を示している取り組みが良いと感じている。高校生が進路選択をする際、やはり高校教員からの進路指導に大きく影響を受けるので、推薦系入試の割合が増える中、ミスマッチの状況を高校教員とも共有できれば良いのではないかと感じた。

#### 「コロナ禍の対応」について

- ・学力面だけではなく、特にコロナ禍において、生活リズムが崩れたり、友達が出来ないといったメンタル面などの理由で大学をドロップアウトしてしまう学生はいないのか？企業でも同じようなことがあり、もし取り組みなどあれば教えていただきたい。

⇒(佐藤学生部長)

- ・コロナ禍で学修がうまく進まなかった学生の状況の中で一つあるのは、リモートの授業に合う・合わない以前に、決められた時間割も無く、オンデマンドで好きな時間にして良いという状況に置かれた時に、自分で予定をスケジュール出来な学生が、結果的に、学修が進まず成果も出せないといった状況になる様子が一年目特に見受けられた。
- ・二年目を迎えるにあたっては、本学にはクラス担任に相当するアドバイザー制度があり、先生方に気をかけていただいたり、4月当初に出来るだけ学生同士のコミュニケーションを様々なチャンネルでとれるようにした。

#### 6. 本日の委員会を振り返って(統括) (大澤 敏 学長)

外部評価委員による評価を受け、大澤学長より以下のように総括が述べられ、閉会した。

- ・小松川先生からいただいたご意見について、修学レベルの広がりへの対応について、先生たちとディスカッションさせていただければと思っている。
- ・文谷先生からいただいたご意見について、質問する力というのはすごく大事だと思う。特に日本人が国際的に活躍する時に、それが出来ないということが非常に大きな問題なので、大きな課題だと認識させられた。

何を発言してもいいんだという安全地帯が必要なんだと思われる。そこを醸成させることも出来るだけやっていきたい。

- ・大森様からいただいたご意見について、地元の企業とコーオペ教育を再開している。企業に学生が行き、フレッシュになって、この学生が欲しいとなった時に、うまくマッチすれば新卒のジョブ型雇用というか、そういう形もとれるというご意見を伺ったので、参考にさせていただきたい。
- ・横越様からいただいたご意見について、昔から、魚を与えるのではなく魚の取り方を教えなさいと言われている様に、小さな成功体験を積み重ねながら、生涯学ぶ力を身に付けさせていく方向でやっていきたい。

本日の委員会を通して、課題をいただき、気づかなかった点に気づかせていただいたことに感謝し、次回も引き続きよろしくお願ひしたい。